



# 動労千葉

85. 7. 26

No. 1999

### 国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）  
（鉄電）二九三五六・（公衆）〇四七二二七二〇七

## 総評大会 が示したもの

# 肉身圧殺・産報化の先頭に闘う労働者

\*\*\*\*\*

七月二六日、監理委員会は「分割・民営化」——十万人首切りの「答申」を提出しようとしており「国鉄」をめぐる攻防は決戦局面にのぼりつめようとしている。こうした緊迫した状況のもとで開かれた総評大会は、「三池斗争以来の決意で闘う」との執行部の決意とは裏腹に、冷めきった雰囲気終始した。この最大の元凶こそ動労「本部」革マルの反動的対応にほかならない。われわれは、動労「本部」革マルの反動性を暴露、弾劾し、裏切りを許さず「分割・民営化」粉碎の闘いを爆発させなければならない。

\*\*\*\*\*

「厳しいから闘うな」と右から  
「総評を牽引」する動労「本部」

七月十五日から四日間、東京・日本青年館において開催された総評第五二回定期大会は、十八日に閉幕したが、今大会は七月二六日に監理委の答申を控えた国鉄問題で、いかなる闘いを対置するかが最大のテーマであった。  
大会は「国鉄再建闘争本部」を設置し「三池闘争以来の決意で闘う」との方針を提起した。  
ところが、総評執行部の決意を無残に踏みにじったのはほかならぬ動労「本部」革マルである。  
動労「本部」副委員長・革マル福原は「三池闘争のように闘うという提起はまことにありがたいが、六〇年代と今とは政治、経済、環境が違う。同盟や民社は分割・民営推進の国民運動を展開するような情勢のなかで、多数派形成をめざす」と発言したのである。すなわち、「情勢が厳しいから闘えない」とする自らの裏切り路線を同盟、民社に責任転嫁して恥じないのである。

これに対し、全国一般の代議員から「動労は分割・民営反対の闘いは軍事大国化に反対する反戦反ファシズムの闘いだ」と規定していたのではないか。タコツボにもぐって敵の攻撃を避けて通れるのか」と批判されたことは当然である。

### 動労の戦斗的伝統を汚した松崎

すると、委員長・革マル松崎が立ち「ふやけていると見られてもいたしかたない。できうればゼネストの先頭に立ちたいと思うがそうもいかないこともわかってる。幅広い戦線を創らなければならぬ」と述べるとともに、「私たちの運動が観念的だったと反省している。民間の仲間がご苦労されている生産現場の厳しさを大いに学ぶことができた」とまで言いきったのである。

松崎は監理委、国鉄当局の「分割・民営化」の恫喝に屈したうえで、「国鉄を守るために骨身を削って働こう」「三本柱をクリアしよう」なる産報化路線のもと、当局と一体となって合理化、首切りを推進し、組合員に労働強化と出向、休職を強制してきた。松崎はこれを反省するどころか

助士廃止反対闘争やマル生粉砕闘争、さらにはスト権闘争など当局の合理化、労働運動解体攻撃と血を流して闘いぬいてきた動労の戦闘的、歴史的闘いを「観念的」と批判しきり、あろうことか、労使協調路線のもとで徹底した合理化、労働強化により搾取・抑圧されている民間労使関係を見習わねばならないというのである。

### 「分割・民営化」賛成の 動労「本部」革マル

これを受けた全電通の代議員は「民営化反対は親方日の丸でいたいことではないか」「分割・民営化反対の理由が茶の間にすんなり入ってこない」と発言し、右派ダラ幹どもを喜ばせ、松崎を援護したことはいうまでもないことである。  
松崎はいう。「戦術の誤った行動によって国鉄を孤立化させるべきではない。総評の再建政策に対する国民的多数派の形成も目的としなければならない」と。

「多数派形成がなければ闘えない」ということは「永遠にストはやらない」と言うに等しいのだ。動労「本部」革マルの路線は「権力万能」闘っても勝てない」との敗北主義に貫かれたものであり、それは革マルが執行部を握ってから一度たりとも闘わない事実を見れば一目瞭然である。動労大会は一方的に「指令権を総評に委譲」し、闘いからの逃亡と責任回避を図っている。国労の「答申」抗議8・5ストへの批判はそのことを自己暴露するものだ。

動労「本部」革マルは「分割・民営化」に賛成し、必ずや首切りの先兵としてたちあらわれることは明らかだ。総評大会の壇上で武藤国労委員長との「握手」まで演出した松崎の反動的本質を見抜き、革マルを一掃して国鉄決戦の爆発をかちとろうではないか。

7.17 毎日 (全国)  
**国鉄問題**  
**再建めぐるって激論**  
総評大会 動労は柔軟姿勢  
【千葉】 国鉄千葉動力車労働組合の総評大会が、七月十五日から四日間、東京・日本青年館で開催された。大会は十八日に閉幕したが、今大会は七月二六日に監理委の答申を控えた国鉄問題で、いかなる闘いを対置するかが最大のテーマであった。大会は「国鉄再建闘争本部」を設置し「三池闘争以来の決意で闘う」との方針を提起した。ところが、総評執行部の決意を無残に踏みにじったのはほかならぬ動労「本部」革マルである。動労「本部」副委員長・革マル福原は「三池闘争のように闘うという提起はまことにありがたいが、六〇年代と今とは政治、経済、環境が違う。同盟や民社は分割・民営推進の国民運動を展開するような情勢のなかで、多数派形成をめざす」と発言したのである。すなわち、「情勢が厳しいから闘えない」とする自らの裏切り路線を同盟、民社に責任転嫁して恥じないのである。これに対し、全国一般の代議員から「動労は分割・民営反対の闘いは軍事大国化に反対する反戦反ファシズムの闘いだ」と規定していたのではないか。タコツボにもぐって敵の攻撃を避けて通れるのか」と批判されたことは当然である。すると、委員長・革マル松崎が立ち「ふやけていると見られてもいたしかたない。できうればゼネストの先頭に立ちたいと思うがそうもいかないこともわかってる。幅広い戦線を創らなければならぬ」と述べるとともに、「私たちの運動が観念的だったと反省している。民間の仲間がご苦労されている生産現場の厳しさを大いに学ぶことができた」とまで言いきったのである。松崎は監理委、国鉄当局の「分割・民営化」の恫喝に屈したうえで、「国鉄を守るために骨身を削って働こう」「三本柱をクリアしよう」なる産報化路線のもと、当局と一体となって合理化、首切りを推進し、組合員に労働強化と出向、休職を強制してきた。松崎はこれを反省するどころか

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！